

## 令和4年度 第1回伊勢崎市総合教育会議 議事録

会議の名称	令和4年度 第1回総合教育会議
開催日時	令和4年5月10日（火）午後2時00分～午後2時50分
開催場所	伊勢崎市役所東館5階第4会議室
出席者氏名	<p><b>【委員】</b>          臂泰雄市長、三好賢治教育長、高山英記教育長職務代理者、野口裕孝教育委員、山洞広美教育委員、里見哲也教育委員</p> <p><b>【事務局】</b>          (企画部) 細井企画部長、新井企画部副部長、高柳企画調整課長、町田係長、小池主査、北爪主査          (教育部) 井野教育部長、丸橋教育部副部長、猪野教育部副部長、斎藤教育部総務課長、宮内教育施設課係長、小保方学校教育課長、町田四ツ葉学園中等教育学校事務長、山本健康給食課長、新井生涯学習課長、和佐田図書館課長、横堀文化財保護課長、久保田係長、半田係長代理、神村主任</p>
傍聴人数	4人
会議の議題	報告事項（1）令和4年度 重点政策の概要について 協議事項（1）SDGsによる共生社会を進めるために、担い手となる子供たちをどう育てていくか
会議資料の内容	<b>【資料1】</b> 令和4年度 当初予算 重点政策の概要
会議における議事の経過及び発言の要旨	<p><b>1 開会〔企画部長〕</b>          ただいまから、令和4年度第1回伊勢崎市総合教育会議を開催します。</p> <p><b>2 市長あいさつ</b>          本日は、教育委員の皆様には大変お忙しいところお集まりいただき、大変ありがとうございます。          今日は、この後、報告事項として重点政策の概要を述べさせていただき、またSDGsによる共生社会ということで協議をしていただく予定になっております。          この、一端になる部分、私の考え方を冒頭に述べさせていただきたいと思っております。          先日、市長メールを市民の方からいただきました。          臨海学校の中止についてということで、「市長はコロナ対策の市長メッセージの中でコロナとの共生という話をして、修学旅行などの行事も再開すると言っているが、臨海学校を中止するというのは、違うのではないか」というような内容でありました。          これについては、教育長ともお話をさせていただいて中止にした理由等、教育委員会の中で議論をしっかりとさせていただいた上での結論ということで、その旨を説明していただいたところです。          この話で何に違和感をもったかということ、共生という言葉がきちんと捉え</p>

られていないのではないかと思います。

市長メッセージの中にもその辺、誤解のないよう書いたつもりではあるのですが、共生というのは、私が昨年市長に就任するときに3つの共生ということで、地域間の共生、世代間の共生、そしてSDGsによる共生という3つの共生を掲げました。地域間はある意味で空間的な部分、合併市町村それぞれがこれから共生していくという意味での共生、世代間の共生は、子供からお年寄りまでそれぞれの世代が自分たちの世代だけではなく、他の世代を思いやって、必ずこれは自分が通った道であり、通る道ということで、世代間での共生を進めるということ、そしてSDGsによる共生で伊勢崎に多い外国籍の方、障害のある方、貧困の問題も出てくるでしょうし、こういった方々との共生を進めていくとお話ししました。

この共生というのは、決して、一緒に住んで仲良くしましょうという意味ではなくて、共生というのは闘いで、文化と文化、違ったものがぶつかりあうものだということです。例えばコロナとの共生という意味で言えば、コロナと仲良くしましょうではなくて、コロナとしっかり闘っていきましょうという意味です。コロナの正体が大体わかってきたところで、コロナに対して闘う、譲るところは譲り、どうしてもやらなくてはならないところはしていくと、そういった意味で修学旅行等は様々な配慮をすればできるけれど、臨海学校の場合は施設が十分なものではなく、そのリスクは決してコロナを排除できるものではないということで、臨海学校は中止されるということです。共生という言葉と一緒に仲良くやりましょうではなくて、もっと厳しいものだということを市長メッセージにも述べたつもりですが、なかなか市民の皆様を理解していただけない部分もあるのかなと思いました。

これから、こういった考え方をしっかり市民の皆様に分かっていただくためにはどうするかというと、1つはICT、デジタル技術によって言葉の壁がなくなったり、障害のある方とのコミュニケーションがうまくできるようになることもあるでしょうが、やはり一番の解決のための道は、教育だと思います。

学校教育は教育委員会でしっかりやっていただくわけですが、生涯学習や様々な地域の文化、歴史を探るということで、伊勢崎の新しい市史編纂も考えたいということも話をさせていただいてありますが、この地域間の共生にも教育の力が必要でしょうし、世代間の共生のところでは、公民館活動や生涯学習と、これから部活動が地域に根差さなければならなくなってくるという点では、様々な世代の人に関わっていただくということも必要だと思います。

SDGsによる教育は、まさしく学校現場で、外国籍の子供たちや障害のある子供たち、なかには今テレビ等の報道でもヤングケアラーの話題等もしておりますけれども、こうした貧困につながるような形のものもしっかり見つけ、そしてまた対応するときに教育現場の力は大変大きなものになると思います。こうした教育がこれからの伊勢崎市の持続可能な発展のために果たす役割は大きいと思っております。

今日は、この1年間伊勢崎市が取り組む事業をそんな観点から見ていただきながら、SDGsということを経営の部分でどう生かし、またSDGsによる社会をつくるために教育がどう担っていただけるのかという話までを協議事項のところで議論していただけるとありがたいと思っております。

是非有意義な会議になることをお願い申し上げて、少し整理ができないままのお話で申し訳ありませんけれども、あいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

### 3 教育長あいさつ

本日は、臂市長におかれましては、大変お忙しい中ありがとうございます。日頃より、市長には教育行政に大変なご理解をいただいたうえに、ご支援、ご指導いただいておりますことに心より感謝申し上げます。

今のお話にもございましたけれども、教育委員会の使命は、市民、子供、幼児から高齢者までの学びの保障であり、豊かな人生を支援していくことだと思っております。中でも特に、この先の本市を支えていく、持続可能な社会の作り手としての子供たちの教育というのは、大変重要なところでございます。誰一人取り残すことなく、一人一人がその可能性を伸ばし、それぞれに豊かな人生を得る、そのための基礎を培うことを私たちの使命と心得ております。

一方で、先ほどの話にもありましたが、貧困の問題、外国籍の子供たち、日本語の不自由な子供たち、障害を抱えている子供たち等々の子供たちにとって、学校また教育は、社会のセーフティネットとしての役割がますます重要になってきています。そこで、政策、施策をどのようにしていくかということも、私たち教育委員会の大きな課題であると考えています。

いずれにしても、市政と教育行政とが一体となって、市民の幸せということを一番の目的にしながら取り組んで参りますので、本日は、教育行政への市長からの忌憚のないご指導、ご支援をいただきますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### 4 署名委員の指名〔市長〕

まず、委員の出欠状況ですが、本日は全委員の皆様にご出席をいただいております。

それでは、次第に従い、会議を進めさせていただきます。

次第4「署名委員の指名」についてですが、議事録作成の際に、議長及び委員1人に、その内容を確認いただいたことへの署名をいただくこととなっております。今回の議事録への署名は、三好教育長にお願いしたいと思います。

#### 5 報告事項

##### (1) 令和4年度 重点政策の概要について〔企画調整課長〕

限られた時間のため、教育関連の項目を中心に、ポイントを絞ってご説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

令和4年度の当初予算規模は、一般会計が777億7,000万円、特別会計が小型自動車競走事業費など5事業合わせて652億8,000万円、企業会計が水道事業など5事業合わせて324億6,000万円で、総額1,755億1,000万円となっております。

当初予算のうち、一般会計につきましては、対前年度比で4.3%増の777億7,000万円の予算としました。

これは、平成17年1月の市町村合併以降、過去最大の予算規模となっております。

一般会計歳出予算のうち、教育費につきましては、対前年度比で6.2%増の、約75億1,000万円、一般会計全体の9.6%を占めております。

次に、重点政策について、特別会計等の分もあわせて、第2次伊勢崎市総合計画後期基本計画の5つの基本政策の分野ごとにご説明します。

まず、基本政策1点目の「市民が健康で生き生き暮らせるまちをつくる」についてご説明します。

「健康・医療」の分野では、市民の皆様が安心して暮らせるよう、新型コロナウイルスワクチンの3回目接種と、5歳から11歳までの子どものワクチン接種を進めます。

次に、基本政策2点目の「市民と産業を支える力強いまちをつくる」についてご説明します。

「都市基盤」の分野では、伊勢崎駅周辺の区画整理事業を行い、併せて電線類の地中化やシンボルロードを整備し、景観に配慮したまちづくりを推進します。また、伊勢崎駅前インフォメーションセンターや南口駅前広場を中

心に、まちなか子ども絵画展やまちなか高校生フェスタ等、各種イベントを引き続き開催し、本市の玄関口での賑わいの創出を図ります。

「産業・観光」の分野では、子どもたちが、食と農の大切さを体験・学習するとともに、市民交流・世代間交流を図るため、農業収穫体験、料理教室、店舗販売体験等を通じて、持続可能な農業振興や地元農産物の普及促進活動に取り組みます。

次に、基本政策3点目の「市民が安心してやすらかに暮らせるまちをつくる」についてご説明します。

「環境」の分野では、あずま南小学校区に、自然とのふれあいによる憩いの場、スポーツ・レクリエーションによる健康推進の場、地震時の一時避難の場として面積約1.5haの公園を整備します。末永く愛される公園となるように整備を進め、快適で安心・安全な住環境を形成し、魅力あるまちづくりを推進します。

次に、基本政策4点目の「市民が自ら学び豊かな心を育むまちをつくる」についてご説明します。

「教育」の分野では、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒等の学校生活を支援するため、学校生活支援助手を学校に派遣するほか、子ども日本語教室未来塾と連携し、日本語の習得や日常の生活習慣を中心とした個別指導や援助を継続して行います。

次に、第3子以降の児童及び生徒を養育する保護者に対し、学校給食費を助成するための要件を拡充し、多子世帯における保護者の経済的負担を軽減し、子育て支援の推進を図ります。

次に、四ツ葉学園中等教育学校では、6年間にわたる計画的・継続的な一貫教育を行い、中等教育学校のメリットを最大限に活用し、特色ある教育を継続して行います。

次に、「生涯学習・スポーツ・文化」の分野では、新型コロナウイルス感染症の影響により、発表会や展示会等の開催を自粛していた文化芸術団体に対し、市内の文化施設等においてコロナ対策を講じた上での発表会等の開催経費を助成します。

次に、市町村合併以降、新しい伊勢崎市としての自治体史の編さんが行われていないことから、市民の皆様に郷土に対する理解と愛着を深めていただくため、新たな市史の編さんに着手します。

次に、「富岡製糸場と絹産業遺産群」構成資産として世界文化遺産に登録された「田島弥平旧宅」について、歴史文化の拠点、地域の教育資源としての保全と活用を進めます。

次に、小学校体育館の照明器具をLED化し、省エネ化を図るとともに、児童の運動環境の整備を行います。

次に、小中学校及び中等教育学校の児童生徒一人一人が、主体的かつ適切にICTを活用することで、論理的思考や情報活用能力など、確かな学力を身に付けられるよう、タブレット端末と全普通教室に配備した電子黒板を活用した授業を進めます。また、機器等の有効活用を促進する人的な環境整備を進めるため、小中学校へICT支援員を派遣します。

次に、スポーツ施設の整備では、赤堀地区にグラウンドゴルフ場の整備を行うほか、陸上競技場についてスタンド防水シートを改修する工事を実施します。

最後に、基本政策5点目の「市民と協働して自立したまちをつくる」についてご説明します。

「協働・共生」の分野では、外国籍住民が多い他の自治体と情報交換や調査研究を行うため、外国人集住都市会議の正会員となり、外国籍住民との共生のまちづくりに取り組みます。

次に、外国籍住民が多い本市において、庁舎内における手続の支援や生活情報の発信のため、外国人総合相談窓口を継続して実施します。

次に、「行財政」の分野では、経営改善が進んだオートレース事業から、

令和3年度に引き続き収益金の一部を一般会計に繰り出し、小中学校のICT教育、施設整備等に活用します。

以上、教育関連の項目を中心に、令和4年度の重点政策の概要について、ご説明申し上げます。

## 6 協議事項

### (1) SDGsによる共生社会を進めるために、担い手となる子供たちをどう育てていくか

(市長)

本日はSDGsによる共生社会を進めるために、担い手となる子供たちをどう育てていくかというテーマで、みなさんからご意見を賜りたいと思います。漠然としたテーマですので、どのような形のご意見でも結構です。それでは順番にお願いします。

(高山委員)

持続可能な共生社会ということですが、持続可能な共生社会かどうかという部分はわかりませんが、基本的な共生社会というのは、いろいろな項目があると思います。性別や、障害、国籍や、職業もそうですが、基本的には人との違いを受け入れることが共生だと私は思っていて、先ほどお話しいただいた重点政策の中の一環に共生が入っているということは、すごくよいことだと思っています。どうしても、共生、ばかりがフォーカスされてしまって独り歩きするのではなく、重点政策の中の一環として共生が入るのはよいなと思います。

重点政策の中でも、「市民が安心してやすらかに暮らせるまちをつくる」という項目があると思うのですが、これはまさしくその通りだと思います。

基本的には暮らしやすさが一番の市の重点政策の肝だと思うのですが、その一環としての共生という意味であれば、共生というものを十分捉えられるのですが、共生、が独り歩きしてしまうのは怖いなど、私自身は捉えています。あくまでも、暮らしやすさや住みやすさ、快適さなど、そういうものがきちんと先に来たらうで、共生社会を実現していきましょうということであれば十分理解ができますが、持続可能な共生というのが独り歩きして前にいってしまうと、本題が見えてこないというのが怖いと感じています。

(市長)

怖い、というのは、実が伴わないでただ言葉だけが出ていく、という部分についてですか。

(高山委員)

言葉の独り歩きというよりは、私は、共生、を基本的にはお互いを受け入れる、と理解しています。冒頭の市長のお話の中に、時には闘う、というのが出てきたと思うのですが、闘う、の意味合いは捉え方によっては怖い部分があると思うんです。仲良しということではなく、というお話をされていましたが、チームワークというのは、仲良しということではなく、一人一人が自立して、自分のことは自分でやる、その集合体がチームワークだと思うんです。そのようになるにはどうしたらよいか、というのを考えたときに、闘う、というニュアンスが出てきたのかなと思うのですが、そういう意味で、捉え方を間違えると怖いな、という印象を受けました。

(市長)

チームという話がでましたが、例えば野球をやるときに、ピッチャーとしてはファーストの選手の方が優れていても、キャッチャーとピッチャーが仲良しだからそのままよいか、というのではなくて、ファーストの選手をピッチャーにするとか、お互いに切磋琢磨してより良いところでチームとし

て勝利を目指すという形がないと、ただ今のまま、喧嘩しないで仲良くやっていた方がよいね、というのはいけないんじゃないかというのが自分の思いです。

やはり、しっかり練習をして、その時その時で最大の能力を持った者を勝利のために選んでいく、そういう形になっていかないといけないんじゃないかというのが自分の考えです。そのために何をしなければならないかというのを考えるときに、共生という考え方を持って、相手の良いところを認めながら、自分の良いところも出す、というのが必要なのだと思います。

ただ、共生、というだけですべてが許されたり、何の努力もできなくなるということはよくないな、という思いです。

教育の部分でSDGsを生かしていくとするといかがですか。

#### (高山委員)

共生自体は受け入れると理解していますが、受け入れるということができていないから、共生、という言葉が独り歩きするのだと思います。結局、何かアドバルーンを掲げるということは、達成できていないということで、やはり伊勢崎にとっては、共生というのが難しいということなのかなと思います。

私の娘が25歳なのですが、彼女が小学生だったときには、35人のクラスの中で5人くらいは外国籍の人がいたり、性別的に男の子が女の子みたいだったり、女の子が男の子みたいだったり、というような子もいたりして、本当にいろいろな子がいる中で育っているのですけれども、きちんとみんなを受け入れて共生しているという形になっていて、そういう子供たちが大人になっているので、展望はそんなに悪くないんじゃないかと思っています。

逆に、私たちの方が、色眼鏡で見てしまったりしているのかなという懸念はあります。

#### (市長)

確かに、子供たちは、子供たち同士の付き合いの中で共生の考え方を獲得しているというのはあるのだと思います。

#### (山洞委員)

私は境地区に住んでいるので、外国籍住民との共生についてお話をさせていただきます。

国の風習や文化の違いはありますが、境地区はまちなかにたくさん外国籍の人が普通に生活をしていますし、小中学校では、外国籍の子供も同じクラスの中で変わりなく生活しています。幼児のころからそのような環境で育つことで、他者を尊重する気持ちが自然に芽生えていると感じています。なので、ある程度の共生はできていると考えています。

また、国籍の違いや障害者の方も同じ人間として接することができるような環境作りが大切だと思います。

男子校3年生の孫と話をしたところ、身近に他国籍の人やLGBTQの人がいても、10代からしたら何とも思わないそうです。年代による思考の差を感じました。また、これについては、孫が中学生の時に、LGBTQについての講演会などがあり、適切な教育が行われてきた成果だと思いますので、継続して授業等で取り扱うべきだと思います。

それから、もっと大人と子供の意見交換を行ったほうが良いのではないかと思います。他者との共生において問題になるのは、私たち大人なのではないかなと感じています。親の考えは子供に大きな影響を及ぼすため、まずは、私たち大人の考え方をある程度変える必要があるのではないかと思います。

また、SDGsの考え方の共有についてですが、メディアや企業もSDGsの取り組みを紹介しており、よく目にはしますが、正直、一般の人に理解

してもらうのは容易ではないと感じています。

先日町内会で、40代から70代の女性が23人集まった席でSDGsについて聞いたところ、言葉は知っているが内容はあまりわからないという人がほとんどでした。大人向けに、誰にでもわかりやすく提示できないものなのかと思いました。

ここにいらっしゃる方は、理解したうえで意見をおっしゃっていると思うのですが、一般の人は何だろうという感じでSDGsの考え方は行き渡っていないのが実情です。わからない人の立場に立って、丁寧に伝えていただくと良いと思います。

子供向けには、SDGsについてわかりやすく書いてある本や、子供向け番組、Eテレでは一緒にSDGsについて学ぼうとか、歌が流れているので、幼児には自然に取り入れることができている、大変よいと感じています。

#### (市長)

高山委員と同じで、子供はもう十分に多様性は受け入れられているということですね。

#### (山洞委員)

そうですね。孫が中学生の時に、学校にLGBTQの方が来て体験談を話してくださったそうで、想像ではなく本人から直接聞いた言葉なので、子供たちはそれを受け入れていて、私が「差別についてどう思う」と聞いたことについて、「聞いた時点から差別が始まっている」と言われました。「僕たちは、そういうことでは差別はしない。もし隣にそういう人がいたとしても、仲間だ。」ということです。だから、親から差別に対しての意識を変えていかないといけないのではないかなと感じています。

#### (野口委員)

今の山洞委員の話聞いていて、自分もずっと現場にいたので思うのですが、子供たちは日本人のように日本の風習をよく理解して育っていくのですが、親が自分の国の風習や習慣を捨てられず、地域の外国籍の方のコミュニティと日本人側がうまくいかないことが多いです。

子供たちは日本人も良い影響を受けるし、外国籍の子供たちも良い影響を受けながらよく育っていつているなと思います。

共生社会を進めるために、担い手となる子供たちをどう育てていくかということ考えると、誰一人取り残さないで力をつけてあげることだと思います。最近、よくヤングケアラーの話が出ますが、自分が担任をしていたときに、そういえばそういう生徒ってずいぶんいたなという記憶があるのです。ただ、生徒は普通のことと思っていて、明るいし、負担とも思っていないし、先生たちも、「ああ大変だな、がんばれよ」という程度で済ませていたのですが、いろいろ聞いていくと、いろいろなものを均等に受けられていない、我慢している、我慢させられているという部分があるのだと思います。そういうところで、土台として、行政でカバーできるところはカバーしていかないと、これからの社会を担っていく子供たちが、均等な教育を受けられなくなる、というところが、自分が一番引っかけたところでした。

それともう一つが、生涯スポーツというところで、自分も中学校ですべて部活動をやっていたのですが、一生懸命やればやるほど、生涯スポーツにつながっていかない。中学校でこれだけやったからと、高校に行ったら全然違う方向に行ってしまうというのが、自分の見てきた子供たちにとっても多いのです。

最近、柔道では全国大会をやめようという話も出てきていますし、部活動をしっかり見直していかないと、子供たちが将来にわたって運動を楽しみながら、自分の人生を楽しむという、生き方に結びつかないのかなと思います。

す。自分たちは場面、場面で一生懸命やってきたつもりだったけれど、それが生涯スポーツにはつながっていません。

持続可能な社会を作る担い手となる子供たちを小学校、中学校でどう育てていくかという、やはり、誰一人取り残さない、というスタート台にきちんと揃えて立たせてあげたい、あとは、中学生と運動は切っても切り離せないと思っているので、生涯スポーツにつながるような部活動にしてあげられればよいのではないかと思います。

(市長)

部活動も、保護者の方がもっともっと高いところへと期待をする部分もありますね。

(野口委員)

練習していると、顧問もそうだけれど、生徒も親も、大会に出るからには勝ちたい、勝たせたいと思う。勝たせるためには、練習試合を増やしたい、という悪循環のようなものもあります。一昔前には、盆暮れ正月以外はずっと部活というのが普通という時期がありましたが、当時の子供たちはあまり生涯スポーツに結びついていないという感覚があります。

(市長)

部活動については、今後2、3年である程度具体的に形を変えなければいけないというところで、喫緊の課題だと思います。

(里見委員)

別の切り口からなるのですけれども、SDGsということについてなのですが、私の感じ方は、一人一人ができることをできるかぎりのことで一生懸命やって、その積み重ねが広がりをもって、よりよい社会あるいは、よりよい世界というのを作り出していくのかなというようなことで、私は理解しております。

そういう中で、例えば環境というような切り口でSDGsについてお話をするとしたら、環境に良いことを、自分なりにできることを少しでもやっている子供たちに関しては、たくさん褒めてあげるといったようなことが大切なのではないかなと、私はやっていないことをダメだというより、やっていることを褒めてあげるといったプロセスのほうが大切なのかなと私は感じています。

上毛かるたで、裾野は長し赤城山、というのがありますが、やはりこのSDGsの活動というのは、裾野、つまり共鳴とか共感をしてくれる人がたくさん増えて、そういう方々が活動の広がりをもつことによって、より良い社会とか世界をつくっていくのだというようなことなのではないかなと思っています。一つは褒めてあげるといったことが大切な点なのかなと感じています。

(市長)

やっていないからと叱るよりは、罰を与えるよりは、褒める、やったことに対して評価するほうが、やる気が起きるといえることですかね。

(里見委員)

どうしても人間ですと、ダメじゃないか、というよりは、よくやれたね、という、じゃあもっとやってみようかな、というようになるので。

その広がりというのが、この活動に関しては大切だと感じています。

(市長)

昔は取り組まないという罰則があったり、温室効果ガスの排出量が多ければダ

メだということで、デメリットがありました。企業の方々もSDGsに取り組むというと、社会貢献でもあるし、企業の名前がよりイメージアップになるようなそんなイメージで、褒められるというところで、取り組んでいく、取り組みが進むのはそういうところにあるのかなと思います。

#### (里見委員)

例えば、株式投資ということで、上場している会社の株式、年金のファンドとかがどういうところに投資をするかということ、それだけではもちろんないのですが、ESG投資という言葉があります。EはEnvironment、SはSocial、GはGovernance、ですけれども、いわゆる、企業市民としての責任を中長期的に果たしていこうという考えの下に経営をされている企業に投資をしていこうというようなこともあります。

もちろんそれだけではなくて、例えば従業員、株主、投資家といったステークホルダーですけれども、従業員からしてみると、あるいはそこに就職をしたいという人ですと、中長期的にそういうことに取り組んでいるんだな、良い企業だな、とか、あるいは自分の身内、あるいは保護者がそういう活動をしているのだな、ということで誇らしくなるかもしれません。

それが決して短期ではなくて中長期的なスパンでこういうことに取り組んでいくことが、割と企業の価値を高めるような動きにつながっていくのだと思います。

#### (市長)

では、全体をお聞きしていただいて教育長からお願いいたします。

#### (教育長)

この度、SDGsについて私も含めて教育委員の皆様と一緒に真正面から考える機会をいただけたと思っております。

今出たお話の中で、共生と言った時に、最初のお話にもありましたけれども、みんなで仲良く、もちろん心の中で仲良くというには大前提ですけれども、一人一人がいかに、社会人としてきちんと自立をしていけるか、また自立していくために必要な学びを受ける機会が保障されているかという、その平等性というのが大前提だと思います。

私は、二中で校長をさせていただいた時に、外国籍の子供たちが、先ほど高山委員からご紹介ありましたとおり、たくさんおりました。やはりその子供たち、様々な個性や能力をもっているわけですけれども、中には親御さんが日本の教育のシステムを理解していないがために、持っている能力を發揮する進路に進めなかったり、あるいは、日常的な、友達と生活する上での言語は十分あっても、学習を積み重ねていくために必要な学習言語と言われるところで、躓いてしまったがゆえに、進学という日本の社会に適應していくための最初のステップを乗り越えられないという子供たちもいました。

そういった子供たちに支援の仕組みをきちんと、今もあるのですけれども、誰一人取り残すことなく提供して、日本人も外国人も平等に自立に向かって歩いていけるような機会、仕組みをさらに整えていくということが大事なのではないかと思いました。

心の上での外国籍の人と日本人の親和性というのは、皆様もおっしゃっていましたが、うらやましいくらい、一言で言うと仲が良いということだと思います。

ただ、外国籍の子供も日本人の子供もお互いに自立していくための、これは伊勢崎市だけの問題ではなくて、日本が今後、外国籍の人たちと共生をして、外国籍の人たちの力を借りるといふ言い方は変ですが、共に手を携えていくために必要なことがあるのかなと、まだまだやっていかなければいけない部分かなと感じました。

**(市長)**

やはり今の伊勢崎の中では、外国籍の子供たちをどう教育するかとか、その子供たちに教育長がおっしゃった平等性をもってしっかりと学びを提供できるかというのは、やはり一番の課題ですかね。

なかなか現場だけでは、要するに学校だけではできない部分もありますか。別な時間で言葉を教えたりとかというものも整えていかなければならないということもありますかね。

**(教育長)**

あると思います。既にNPOなどの力を借りながら教育委員会としては進めてはいるところですけど、まだまだ機会を拡充する必要があるのではないかと考えております。

あとは、これからコロナが収束してさらに外国籍の人たちの流入が多くなった時の、受け入れ初期の子供とその保護者に対する支援をどうしていくかということかと思えます。特に親御さんに対する最初の支援というものが、その先長く日本に滞在してもらうために子供をどう日本で育てていくかということが大事なわけなのですが、外国人のコミュニティの中だけで外国籍の人たちが小さく生活するようになってしまうと、なかなか日本の仕組みに触れる機会がなくなってしまいます。

いかにその外国人のコミュニティのキーパーソンを柱にしながら、日本の仕組みとどうアクセスしていくかという、その辺のところがかねがねの研究課題なのかなと思っています。

**(市長)**

そのためには、子供の部分は学校で見えていただく部分はありますけれど、親の部分という、やはり企業の方たちにも色々をお願いをして、雇用の条件もそうですが、地域の中に溶け込んでいただけるような動きをしてもらうことが大事ですね。

今回のコロナのワクチン接種で外国籍の人に、なかなかワクチンを打っていただけない状況だったときに、雇用先である企業で商業をしっかりといただいたら、県内でも外国籍の人のワクチン接種率は、伊勢崎市はかなり良いほうになってきたことがありました。

やはり親の世代は働いている場所できちんとした情報が届けば、きちんと対応していただけるということで、皆さんどうしていいかわからない部分がある中で動いていただくということがあると思うので、情報を適切にそういった場所に届けるということも、これは教育委員会ではなく市長部局でやっていかなければならないことだと思いますが、その辺をうまく連携をしていくことが大事ですかね。

**(教育長)**

関係部局の力を借りながら、子供たちが日本の学校教育にスムーズに適応していけるような、ご支援をいただけるとありがたいと思います。

**(市長)**

ありがとうございます。範囲が広い話で恐縮ですが、他にご意見ありますでしょうか。

**(山洞委員)**

教育委員にならせていただいてから、一番関心を持っているのがヤングケアラーです。たびたび何かあるときに、ヤングケアラーについてお話をしますが、こんなに身近にヤングケアラーの子供がいるということに今まで気づいていなかったものですから、子供たちが周りの人に「助けてくれ」という言葉を言っても何もしてもらえない、と諦めているというのが現状だと

いう事を知りました。

学校に行きたくても行けない子供なので、どうか何かの方法で、もう少し地域ぐるみでその子供たちに手を差し伸べていただくことはできないものかと思ひまして、その点をお願いしたいです。気づかないところにたくさんいらっしゃいます。

**(市長)**

なかなか、実態調査というのが適切にできないで、いま伊勢崎市がどういう実態か、どういうヤングケアラーの子供たちがいるのかというところが見えていないところはあるのですが、やはり学校現場がそういった子供たちを見つける一番の場所になるのでしょうか。

**(教育長)**

現状、山洞委員からご指摘をいただいたように、地域社会の中から、あの家庭はヤングケアラーのお子さんがいて、なんとかしなくてはいけないのではないですか、という声はなかなかあがってこないです。

やはり学校の中で、児童虐待と同じように学校で子供の生活の様子から発見をするということが多いです。

学校は、医療や福祉をつなげるプラットフォームみたいな役割を果たしていますので、スクールソーシャルワーカーという社会福祉士や精神保健福祉士という資格を持っている人がいらっしゃいますが、その人と協力をしながら家庭に介入していきます。ただ、学校の教員が家庭に介入するというのは本当に難しい問題で、子供を何とか支えるには、子供が生活している大本の問題が改善しないかぎり、子供の問題が解決しないという事例も抱えているというのが実態であり、努力しているところです。

**(市長)**

それぞれが全部個別の事情を抱えていると思うので、何か一律に支援をすれば良いということではないと思いますから、やはり家庭に入って、その家庭に合った支援をしなくてはならないと思います。

これは福祉の関係であったり、しっかりサポートできるような体制をつくっていかねければ、今十分あるとは言えない部分もありますから、その辺は学校としっかり連携しながら、そういう情報があつたときに、こちらがそこに適切に対応できて支援ができるようなものをつくっていかねければならないと思います。

**(山洞委員)**

市によっては、ヤングケアラーと分かった場合に、家事などに対して、ヘルパーさんを派遣する、そういう対処法もあるということを知っています。

行きたいと思っても行けない子供というのが一番かわいそうだと思いますので、なるべく地域ぐるみで、対応ができればと思います。

ただはっきりと言わせていただいて、ヤングケアラーという言葉を知らない地域の方はたくさんいらっしゃいます。もう少しヤングケアラーについて理解を求めるようなことを、広報か何かで知らせるようなことはできないのでしょうか。

**(市長)**

担当とも話をしてみますが、ただ家庭のお手伝いをしていますという部分だけではなくて、本当に自分の時間を本来費やすべき時間が取れないぐらい家庭の中でやらなければならないという状況の子供と言うのは、本当に大変な状況にあると思うので、そういった子供たちに対して支援を具体的にする方法というの、しっかりと考えていきたいと思っています。

それをしっかり地域の皆様、市民の皆様に分かってもらうというのも、どういう形でできるのか。地域が支えあえればよいということもあるのだと思います。

**(山洞委員)**

それが一番よいですね。

**(教育長)**

現状でも学校でそういったお子さんに気づいた時に、一番重たい状態が多いのが、ご家庭で保護者の方が心を病んでいらしたりして、お子さんが家事を手伝わざるをえないような状況です。

ただ、数の面で家族の世話というところで圧倒的に多いのは、小さい弟や妹の面倒を休日、お父さんやお母さんが出かけるときに面倒を見ている、というのが、子供の生活実態を調査すると出てきます。

確かにそれを負担に感じていて、自分のやるべき生活に支障があるならば、それはヤングケアラーという話に入るのかもしれませんが、最初に申し上げた、本当に重たいケースの場合には、直ちに、学校は教育委員会のみならず、福祉こども部の子育て支援課などにつないで、そこからケースワーカーさんを派遣していただいたりですとか、学校でケース会議を開いたりして個別の対応というのは進んでおります。ただご心配の、不登校で学校を休んでいる子供たちの中にも、そういったヤングケアラー的な、生活環境が原因で、学校に行けなくなっている子供がいるのではないかとのご心配だと思います。

**(山洞委員)**

そうですね。現に知っている家の子がそうだったものですから。ただ、本人が、自分がヤングケアラーだとは思っていない子が多いです。

そうすると、ヤングケアラーとは言っても、自分はただ、妹、弟の世話をしているから、学校に遅刻するんだ、学校に行けないんだ、ただそれだけの感覚なんですね。それがだんだん、学校に行けない、が、学校に行きたくない、になってしまうと、そこで一人の子供をダメにしてしまうわけですから、何かちょっと手を差し伸べてあげることができればと思います。

**(市長)**

この辺は、しっかりと教育部門と福祉の部門が連携できるように、これからも考えていきたいと思っています。

**(教育長)**

先ほど野口委員から、最後に部活動のことに触れていただきましたけれども、これから大いに議論をしていかなければならないことで、私の印象ですと、報道先行で、これから現場はどうしたら良いのかと雲をつかむような状況です。

やはり、まずは子供本位に考えて、子供が生涯にわたってスポーツを愛好できる、そのために学校はもとより、地域社会でどういった環境をつくっていくのか、という議論が先ではないのかと思っています。

この議論には市長部局の様々なご意見もいただければと思っていますので、よろしく願いいたします。

**(市長)**

スポーツ振興課を含めて、市長部局にあるスポーツ関係のスポーツ協会等もありますし、また地域が受け皿になるのかどうかということも含めて、議論はそろそろ始めるところではあるということでしょうか。

いきなり明日からというわけにはいく話ではないでしょうから、やはり、

その辺は受け皿の部分を含めて色々話し合いが始まるというところで、しっかりそこは協力をして、連携をしていければと思っています。

大変貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。今日のお話をいただいて、本当にこれからも教育委員会と市長部局の連携をしっかり強めていかなければならないというのは、間違いなことだと思っております。また伊勢崎市には、大変すばらしい教育委員の皆様にご活躍をいただいていること、本当に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

**7 その他**

特になし。

**8 閉会〔企画部長〕**

長時間にわたりまして、活発なご協議ありがとうございました。

次回の開催日程につきましては、協議案件が生じた場合に、改めましてご連絡をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

以上をもちまして、令和4年度第1回伊勢崎市総合教育会議を閉会します。